

# 謝靈運『金剛般若經注』の基礎的研究（上）

——僧肇撰と伝えられる『金剛經註』一卷との関係について——

鵜飼光昌

- 一 はじめに
- 二 鳩摩羅什訳『金剛般若經』
- 三 僧肇撰『金剛經註』
- 四 謝靈運撰『金剛般若經注』
- 五 『金剛般若經』僧肇・謝靈運注文対照表（前半）

一

六朝の東晋期以降、その多くが官僚でありまた貴族でもあった当時の文人たちに必須の事柄として求められたのは、官僚としての最低限の政治的手腕を別にすれば、優美繊細な江南文化にふさわしい洗練された高度の文学的芸術的才

能と豊かな機智を具えることであり、そしてまた一方では永嘉の乱を契機として、爆発的とも言うべき速さで社会の上下に浸透していった外来の宗教である仏教に対する確かな教養を持つことであつたといえよう。

劉宋の文人謝靈運（三八五〜四三三年）は、政治の大勢に大きな影響を与え得なかつた官僚としての行動には見るべきものがなかつたとしても、文人の本領とも言うべき詩作の分野においてはまさに卓絶した才能を持ち、また当時の流行の思想であつた仏教に対しても少なからざる貢献をしている。例えば『文選』に収録された数々の佳詩はその才能が遺憾なく發揮されることによつて生み出された文学活動の精華とも言うべきものであり、また訳文等が必ずしも良質のものではなかつた北本『涅槃經』四十巻を治定して南本『涅槃經』三十六巻を作り上げたことはその仏学重視の姿勢の現われと考えることができよう。

それに応じて謝靈運研究においても、従来からその詩を中心として多くの論考が著わされてきたのは当然の事としても、かつては等閑視されがちであつたその一方の柱とも言うべき謝靈運と仏教の交渉の側面においても近年より深い研究が行われつつあり、また両者の架け橋となるような文学と思想とを融合させて論じた優れた研究もすでにいくつか生み出されている。

本稿は謝靈運の仏学に対する貢献の側面を研究するうえにおいてその一助たりうることを願うものであり、僧肇撰と伝えられる『金剛經註』一卷と謝靈運の著わした『金剛般若經註』との関係の究明を通じて、散逸したと考えられてきた謝靈運の『金剛般若經註』が現存していることを証明することにより、その思想解明に一資料を提供することを意図している。

まず『金剛般若経』そのものについて略述することにする。

『金剛般若経』は、詳しくは『金剛般若波羅蜜経』もしくは『能断金剛般若波羅蜜多経』と称され、「金剛石」(ダイヤモンド)あるいは「金剛杵」(雷)が一切の物を推断するように、「般若波羅蜜多」(智慧の完成)がすべての執著や煩惱を断ちきることを説いた経典であつて、数ある般若経典の中でも「空」の思想の精粹を簡潔に述べていることから、インド本国をはじめ中央アジア・モンゴル・中国・チベット・朝鮮・日本等の各地において盛んに愛読され、信奉されてきたものである。この経典のサンスクリット原典の写本は、日本・中国・チベット・東トルキスタン・ギルギットなどに伝えられており、またその翻訳についても漢訳をはじめとしてチベット語・コータン語・ソグト語・モンゴル語・満州語の諸言語による訳本が現在まで伝えられていて、本経の流伝の広さから見ても大乘諸経中の屈指の経典の一つに数えられるであらう。<sup>1)</sup>

この『金剛般若経』において説かれるのは空の思想である。それは、一切事物において、他に依拠することなく自立的に存在する本体は存在しないことをさとることに外ならないのであるが、この空の思想は『金剛般若経』においてしばしば次のような逆接的な表現となつて現われる。

世尊の問い。「須菩提よ、どう思うか。もし人が三千世界を満たすほどの七宝によつて如来に布施したならば、この人が得た福德は多いであらうか。」

須菩提の答え。「世尊よ、それははなはだ多いといえます。それはなぜかといえ、この福德は眞の福德ではな

いからです。だから如来は福德が多いとお説きになつてゐるのです。」

この「福德は福德ではない。だから福德である」とするような自己否定の一見矛盾に満ちた論法は經中に二十回近くも現われ、如来の三十二相の特徴や經典の言葉、このうえなく正しいさととり等の仏教徒にとつて極めて重要だと考えられる概念がすべて否定されてしまう。それは言わば否定を通して空を直接的に表現しようという方法なのであつて、右に挙げた例でいえば、布施をした人が功德を積んだと思つたならば、もはやそれは眞の功德ではないこと——無執著の重要性——を説くことにより、究極の目標である智慧の完成へと導くものであろう。

『金剛般若經』は、インドにおいて、西紀一五〇年か二〇〇年ごろには成立してゐたであろうとされ、極めて重要視されて多くの論が著わされた。無著菩薩造『能斷金剛般若波羅蜜多經論頌』一卷(唐 義淨訳)、天親菩薩造『金剛般若波羅蜜經論』三卷(元魏 菩提流支訳)などがその代表的なものである。

中国においてもこの經典は非常に重んぜられた。それは、山東省の泰山の巨大な一枚岩に金剛經の一〇四三字を刻みつけた經石峪が残されていたり、敦煌発見の古写經中、『法華經』写本に次ぐ多数の残本量を示していること、さらには唐代禪宗六祖慧能がこの經文中の「心に住する所無くして、而も其の心を生ずべし」の一文によつて豁然と大悟したとの伝説が存在すること、さらには唐初にはこの經典の注釈書を著わした人が八百余家あつた(楊圭「金剛般若波羅蜜經旧序」)と伝えられていることなどによつても、この經典の盛行ぶりの一端が窺われよう。<sup>(4)</sup>

現存する最古の漢訳は弘始四年(四〇一)に訳出されたとされる鳩摩羅什訳の『金剛般若波羅蜜經』一卷である。

その後、元魏菩提流支、南朝陳の眞諦、隋達摩笈多、唐玄奘、義淨によつて改めて漢訳されているけれども、最も人口に膾炙し、中国・日本における仏教史上に大きな役割をはたしたのが羅什訳であることは言を俟たない。試みに

『昭和法宝目錄』第一卷「大正新脩大藏經勘同目錄」(二一三頁)を紐解くと、この羅什訳『金剛經』に対する諸注釈として、中国・日本合わせて百部以上もの書が挙げられているが、それによっても羅什訳がいかに重視されたかを知ることができよう。

注

(1) 『金剛般若經』に関する研究・和訳・注釈書は極めて多いが、次の四書がその代表的なものである。

中村元・紀野一義訳注『般若心経・金剛般若経』(岩波文庫 一九六〇年)

梶芳光運『金剛般若経』(大蔵出版 仏典講座6 一九七二年)

長尾雅人・戸崎宏正『大乘仏典1 般若部経典』(中央公論社 一九七三年)

平井俊栄『般若経』(筑摩書房 仏教経典選2 一九八六年)

岩波文庫の『般若心経・金剛般若経』の解説には、サンスクリット原典・漢訳をはじめとする諸本およびインド・中国・日本の諸注釈について詳しくふれられている。

(2) 梶山雄一・上山春平『空の論理へ中観』(角川書店 仏教の思想3 一九六九年) 梶山雄一『般若経——空の世界』(中公新書 一九七六年) 参照。

(3) 中村元前掲書解題二〇二頁参照。

(4) 『金剛般若経』の伝承および普及の諸相については次の三氏の論考を参照のこと。

牧田諦亮「漢訳仏典(伝承上の一問題——金剛般若経の冥司偈について——」(『龍谷史壇』56・57合冊号 一九六六年)(後に『中国仏教史研究 第二』第四章所収 大東出版社 一九八四年)

平野顕照「刻経と写経——金剛般若波羅蜜多経を中心として——」(『大谷大学所蔵敦煌古写経』続 一九七二年)(後に『唐代文学と佛教の研究』第三章第三節所収 朋友書店 一九七八年)

平井有慶「金剛般若経」(牧田諦亮・福井文雅編『講座敦煌7 敦煌と中国仏教』I 敦煌仏典と中国仏教 所収 大東出版社 一九八四年)

(5) 中国・日本で著わされた諸注釈については小野玄妙『仏書解説大辞典』第三卷四四七頁以下に詳説されている。

三二

さて本稿において最初に取り上げる伝僧肇撰『金剛經註』一卷は、羅什が同經を訳出してから後に著わされた最初の注釈であるとされ、『大日本中統藏經』第一輯第三十八套第三冊に、晋 僧肇撰『金剛經註』一卷（内題の具名は『金剛般若波羅蜜經注』）として収められている。

しかし根本資料とすべき梁の慧皎の『高僧伝』卷六僧肇伝<sup>(6)</sup>には、僧肇が金剛經に注したという記事は見えず、また現存する最古のしかも信頼すべき経録である梁の僧祐の『出三藏記集』<sup>(7)</sup>にも僧肇が金剛經に注した事実を示す記事はなく、また『歴代三宝紀』『開元釈教録』『隋書』経籍志『旧唐書』経籍志などにも著録されていない。僧肇の名は見えないものの、降って『宋史』卷二百五芸文志四に、

僧心之 四注金剛經 一卷

とあり、入宋した高麗沙門義天（一〇五五〜一一〇一、宋の仁宗から哲宗代）が著わした『新編諸宗教藏総録』（義天録）卷第一に、

金剛般若經注一卷 僧肇等四注 応之集<sup>(8)</sup>

と記されているのと対照すれば、僧応之の編纂にかかる所謂『四注金剛經』に僧肇の注が含まれていたのではないかと推測されうるにすぎない。

一方日本においては僧肇単注の金剛經の名が、正倉院文書の天平勝宝六年（七五四）、唐の玄宗、天宝十三載）の「經疏出納帳」に、

注金剛波若經一卷 肇法師<sup>(9)</sup>

と見え、さらに興福寺沙門永超が撰した『東域伝灯目錄』（永超録）（寛治八年、一〇九四、宋の哲宗、紹聖一年）にも僧肇注の存在が記載されている。

註金剛般若經一卷 姚秦沙門釈僧肇撰<sup>(10)</sup>

しかしその後の肇注金剛經がいかに伝えられていったかについての経緯は、現在までのところ詳らかにしえなかった。次に肇注金剛經について最も詳細な記事を載せるところの、徳川時代の天台沙門敬雄<sup>(11)</sup>（正徳三年〜天明二年 一七

一三〇一七八二)が宝曆十二年(一七六二、清の高宗、乾隆二十七年)に著わした序文(敬雄刊行『肇公注金剛經』の巻首に附す)を次に掲げる。

註金剛經序

金龍沙門 敬雄 撰

曩昔慈覺大師之入于支那也、齋持晋肇公注金剛經而帰、秘諸名山、光明不照世也、殆九百年矣、頃祖芳禪人持來告曰、是乃祖請來之本、予偶得之、請師校而梓之、使見聞者、結般若種子焉、予受而読、半乃掩卷歎曰、夫此經者、般若第九會、直示無往生心妙旨、故云為發最上乘者説、蓋一切菩薩、未有不學般若、成無上菩提者、故弥勒天親無著功德施四大菩薩、造之偈論、讚揚弘通、法流乎支那、羅什初訳肇公乃注、從時厥後、奉為日課者亦多矣、且黃梅印心、曹溪悟道、靈瑞之著、注疏之多、宜莫此經若也、而其注之旧、肇公為先、注來於大東、亦此注為先、而發諸注既行之殿者、豈非時節因縁乎、天台大師會講此經、專依肇公、猶如説觀經、專依淨影也、故今每有疑誤、輒依天台疏以校讎焉、嗟乎、斯注者、天台所欽用、慈覺所請來、文古義幽、深得仏意、且投好略機、実苦海津梁、迷塗司南也、梓而行之、則其利益復如何哉、故隨喜以校、亦願後之読此注者、因指得月、悟無往生心妙旨、則与黃梅曹溪、同一鼻孔出氣、不必紛紛更從事於後世異説、而哆以為博也

宝曆十二壬午之夏(統歳經三十八套三冊二〇八頁右上)

事の眞偽はさておき、敬雄の言に従つて『金剛經註』に関係ある事柄のみを整理すると次のようになる。

- (a) 慈覺大師円仁が入唐した時、肇公注金剛經を請來し、名山(比叡山を指すか?)に秘し、九百年の間、人に知られる事がなかつた。



(b) 先頃、祖芳禪人がこの書を手に入れ、敬雄に校勘と上梓を求めた。

(c) この書には、インドにおいては弥勒・天親・無著・功德施の四菩薩の偈論があるが、中国に東流しては鳩摩羅什が初めて漢訳し、次いで僧肇が注した。この書は禅宗五祖の弘忍〔黄梅〕や六祖慧能〔曹溪〕に重視され、その注疏は枚挙にいとまがないほどであるが、その古さの点では肇公注をもって第一とする。

(d) 日本に伝ったのもこの注が最初であるが、長い間知られず、多くの注疏が現われたその最後に発見されることになった。観経を説くのに淨影寺慧遠の疏によるがごとく、天台大師智顛はこの経を講説するのにもつばら肇公注によった。そこで疑問や誤りがあるたびごとに肇公注を天台の疏によって校讎し、上梓する。

この序文に記された記事を踏まえて小野玄妙編『仏書解説大辞典』第三卷四五八頁には、敬雄が刊行した僧肇撰と伝えられる『金剛経註』一卷を次のように解説する。

#### 金剛経註

①〔書名、具名〕(日) Kon-gō-kyō-chū. (支) Chin-kang-ching-chū. 金剛般若経注

②〔巻数〕一卷

③〔存、缺〕存、卅統一・三八・三

④〔著者、生存年代〕晋僧肇(——義熙一〇 A.D. 414) 注、応之集

⑥〔内容解説〕字句の意義を明し、並に本文につきて普通の解釈をほどこしたものであつて羅什訳金剛経に対する註疏としては恐らく一番最初になされたものであろう。従つて後代の訓註に見るが如く本文が分節等に分段されて居ない。

⑧〔写刊の年代〕宝曆一三刊

⑨〔現所蔵者、図書館書庫名〕（駒大）（龍大、二四二・一三一―一四）（谷大、餘大、三四〇二）  
 このうち④で「晋僧肇注、応之集」とあるのは先きに挙げた『義天録』の記事（三七頁）に基づくのであろうが、敬  
 雄の拠つた原本がはたして『仏書解説大辞典』に言うように応之集の『四注金剛經』であるかどうかは今のところ必  
 ずしも明らかではない。

刊本は⑨に挙げられた他にも佛敎大學図書館にも一本が蔵されている。駒沢大、龍谷大、大谷大、佛敎大の四本と  
 も巻首にはいずれも「金龍沙門敬雄撰」の「宝曆十二壬午之夏」に書かれた「注金剛經序」が附されており、巻末の  
 刊記には「宝曆十三癸未春二月」（一七六三）として刊行年月とともに「堀川通仏光寺下ル町 植村藤右衛門」以下  
 書林五家の名が記されていて、刷りの時期は別にしても同一の刊本であろう。若干の相違については以下の通り。

(a) 駒沢大學所蔵本 請求番号 魯二二八。外題「金剛經注 全」（書題箋）、内題「金剛般若波羅蜜經」、撰訳者  
 名「姚秦三蔵法師鳩摩羅什訳 姚秦釈僧肇注」。二十六丁表の最後に「宝蔵論 釈僧肇著 全一冊板行出来」と  
 あり、巻末に右に挙げた刊記がある。

(b) 龍谷大學所蔵本 敬雄撰「肇公注金剛經助覽」と二冊で一部になっている。

ア 「金剛經註」 請求番号 經論積一〇〇二―一。外題「肇公注金剛經」（刷題箋）、内題、(a)に同じ。刊記あ  
 り。

イ 敬雄撰「肇公注金剛經助覽」一卷 請求番号 經論積一〇〇一b―一。「助覽」は「金剛經註」の再注釈で  
 ある。外題「肇公注金剛經助覽」（刷題箋）、内題「肇公注金剛經助覽」、撰者「後学沙門 金龍敬雄纂」。序に、

「今茲壬午<sup>ノ</sup>秋、欲<sup>レ</sup>梓<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>注<sup>ヲ</sup>、一番校勘<sup>ス</sup>焉、又応<sup>ニ</sup>三三子<sup>ノ</sup>請<sup>ニ</sup>、講<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>經疏<sup>ヲ</sup>、因<sup>テ</sup>想<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>注甚<sup>ク</sup>簡<sup>ナリ</sup>、若孤<sup>ニ</sup>行<sup>セハ</sup>之<sup>ヲ</sup>、則初機多<sup>ク</sup>滯<sup>シ</sup>、乃正<sup>シ</sup>依<sup>ニ</sup>智者<sup>ノ</sup>疏<sup>ニ</sup>、旁<sup>ニ</sup>採<sup>テ</sup>諸家<sup>ノ</sup>說<sup>ヲ</sup>、以補<sup>ニ</sup>苴<sup>シ</sup>缺漏<sup>ヲ</sup>、題<sup>シ</sup>曰<sup>ニ</sup>注金剛經序覽<sup>ニ</sup>云<sup>ニ</sup>とある。刊記はアと同じ。

(c) 大谷大学所蔵本 龍大本と同じく『肇公注』と『助覽』が二冊で一部になっている。

ア 『金剛經註』 請求番号 内餘大三四〇一一。外題、(b)のAに同じ。内題、(a)・(b)のAに同じ。卷末の刊記なし。

イ 『助覽』 請求番号 内餘大三四〇二一一。外題、(b)のイに同じ。内題、(b)のイに同じ。卷末の刊記は(b)のイに同じ。刊記の後に一丁半にわたって「平安書肆 興文閣蔵版目錄」として六十六の書籍の目錄が附されており、金剛經関係ではこの『肇公注金剛經』だけではなく『小金剛經面山和尚改正訓点全二冊』『金剛經六祖大師解義全二冊』『金剛經川老註 全三冊』『金剛經慧浄註 全三冊』などの注釈書が同時に出版されていたことが解る。

(d) 佛敎大学所蔵本 請求番号 佛書三九八。打付外題「注金剛經」(墨書)、内題、(a)・(b)・A・(c)・Aに同じ。(a)から(d)までの四書のうちで最も傷みがはげしい。

しかしこのように僧肇の名が冠されていくつかの刊本が残されているにもかかわらず、僧肇が『金剛經』に注したかどうか、また現存の『金剛經註』がはたして僧肇の撰したものであるかどうかについては早くから疑いが持たれているのであって、湯用彤<sup>(12)</sup>、任繼愈<sup>(13)</sup>、鎌田茂雄<sup>(14)</sup>の諸氏は当該書の存在に言及せず、塚本善隆氏は「仏敎史上における肇論の意義」<sup>(15)</sup>において、『肇論』の外に僧肇撰の名で今日に伝わっているものとして、

## 1 註維摩詰經十卷

謝靈運『金剛般若經注』の基礎的研究(上)

2 百論序

3 長阿含經序

4 寶藏論一卷

5 梵網經序

6 金剛經註一卷

7 法華經翻經後記（法華經傳記二所収）

8 鳩摩羅什法師誄

の八書を挙げ、1『註維摩』・2「百論序」・3「長阿含經序」についてそれぞれ真撰であることを考証した後、4『寶藏論』以下は僧肇のものとは認め難いとし、『金剛經註』が僧肇の真撰だとはしていない。同じく牧田諦亮氏も「肇論の流伝について」<sup>(16)</sup>において、その真撰を疑っている。

(6) 『大正藏經』五十卷三六五頁a段〜三六六頁a段。

(7) 『大正藏經』五十五卷一頁〜一四頁。

(8) 『大日本仏教全書』一卷十四頁上段。また『大正藏經』五十五卷一一七〇頁c段。

(9) 東京帝國大學文庫大學史料編纂掛編纂『大日本古文書』「正倉院編年文書」卷之三 六四七頁（一九〇二年刊）参照  
 （石田茂作『写経より見たる 奈良朝仏教の研究』〔東洋文庫 一九三〇年〕の「奈良朝現在一切経疏目錄」より檢索。  
 またこの『奈良朝仏教の研究』に僧肇注金剛經の記載があることは、後掲の宇井論文によつて知つた。

また僧肇注とは記載がないものの『金剛般若經注』についての記録が同『大日本古文書』二卷七一三頁、八卷九六・一一五・一二三頁、九卷四四三・四四四頁、十卷一四六・一四八頁、二十卷三〇〇頁、二十一卷四・六二・四二〇頁、

二十二卷三九一・五七四頁に見える。

(10) 『大日本仏教全書』一卷四〇頁上段。

(11) 鷲尾順敬著『増訂再版 日本仏家人名辞書』(東京美術 一九二一年)一九五頁から敬雄の伝を引く。( )内は筆者がおぎなつたものである。

- キョーオー 敬雄 (正徳三年〜天明二年、一七一三〜一七八二、清の聖祖康熙五十二年〜高宗乾隆四十七年)(日記)二二七三〜二四四二(天台宗) 武蔵足立吉祥寺の学僧なり、敬雄<sup>ケイウ</sup>字は韶鳳、号は金龍道人、別号癩道人、道菴菴主人と云ふ、又南無三宝と云ふ印を用ふ、武蔵の人なり、幼にして出家し、比叡山に登りて天台の宗養を学び、後東國に遊び、江戸浅草金龍山に寓して学誉高く、時人呼ひて金龍道人と云ふ、遂に自ら号となす、寛延の初の頃常野の地方に遊び、一時日光山に寓す、宝暦二年(一七五二)、三十歳にして下総正安寺の法席を董し、幾もなく輪王寺宮公啓法親王の懇命により、武蔵足立の吉祥寺に転し、学誉益高し、自ら書齋を道菴菴と号し、道菴菴夜話を作る、明和六年(一七七〇)四十七歳にして寺務を辞し、四方に浪遊す、畿内より長崎に至り、古跡靈地を歴訪す、其後美濃安八の善学院に閑棲して学徒に接す、安永九年門下の学徒相謀りて善学院に師の寿碑を立つ、藤原公繩寿碑銘を撰して師に贈る、天明元年の冬微疾あり、翌二年正月の初め、予め死期を知り、壁間に浄土の曼陀羅を掛けて趺坐合掌し、正月八日晏然として寂す(一七八二)、寿七十なり、師平素氣象磊落、胸襟濶達にして細行に拘束せず、真言宗の行願、浄土宗の大我等に交深く、共に奇僧の名ありき、著作天台靈標三卷、註金剛経助覽、老子玄覽、雨新菴詩集、道菴菴夜話、各二卷、祇材詩材、祇林聯芳、各一卷あり、(寿碑銘、善学院返信、近世仏家著作目録稿本)。
- (12) 湯用彤『漢魏兩晋南北朝仏教史』上冊二二三頁〜二三六頁「僧肇伝略」(中華書局 一九八三年)。
- (13) 任繼愈主編『中国仏教史』第二卷、四七〇頁〜五二二頁(中国社会科学出版社 一九八五年)。
- (14) 鎌田茂雄『中国仏教史』第二卷、二八五頁〜二九五頁(東京大学出版会 一九八三年)。
- (15) 塚本善隆『仏教史上における肇論の意義』(京都大学人文科学研究所編『肇論研究』一四六頁 一九五五年)。
- (16) 牧田諦亮『肇論の流伝について』(『肇論研究』二七五頁)。

四

一方、次に謝靈運が『金剛經』に注した事実を検してみると、やはり『宋書』謝靈運伝等の根本となる資料にはその事実は見えず、はるかに降つて唐代の李儼が、長安西明寺の釈道世の著わした『集註般若』三巻のために書いた序文「金剛般若經集註序」に記されているのみである。

然此梵本至秦弘始、有羅什三藏、於長安城創訳一本……兼有秦世羅什・晋室謝靈運・隋代曇琛・皇朝慧浄法師等、並器業韶茂博雅洽聞、耽味茲典俱為注釈、研考秘蹟咸聘異義（大正藏五十二卷二六〇頁a段）

また清の無是道人註解の『金剛經如是解』一巻に附された性琮（一五七六—一六五九）の跋に謝靈運の名が見える。

所見金剛經註釈、種類非一、中有釈論三卷、乃天親得之無著、無著得十行偈於日光定中、出定而授者、嗣後謝靈運・曇琛・慧浄、以至圭峯・中峯、各有發明……主般若堂八十三歳老僧性琮和南謹識（統藏經三十九套三冊二〇五頁右上）

同じく清の仲之屏彙纂の『金剛經註正訛』一巻に附された、徐來賓の「金剛經註正譌序」（康熙十五年 一六七六）にも、

如金剛一經自鳩摩羅什訳之長安……即釋義自謝靈運・曇琛註後、越今數十百家、行世者、惟中峰・圭峰・長水三家言耳（統藏經三十九套四冊三二二頁右下）

とあつて、唐の李儼、清の性琮、徐來賓とも金剛經の注釈者として謝靈運の名は挙げていても僧肇の名を明記しないのが注目される。

また近代の研究では葉笑雪氏がその著『謝靈運詩選』後半の「謝靈運伝」の最後に附された著作目録に、

『金剛般若経注 見文選注及弘明集引金剛經集注序、已佚』<sup>18)</sup>

として同書の巻末の注記に文選李善注所載の佚文一条と李儼の「序」を載せるものの『金剛般若経注』自体は散逸したものとし、また楊勇氏はその「謝靈運年譜」の「元嘉八年辛未(四三一) 四十七歳」の項に、『涅槃経』の再治、『十四音訓絞』の撰述とともに「此外金剛般若経注、亦士林所推重者」<sup>19)</sup>と述べ、『金剛般若経注』の存在に言及している。

さらに顧紹柏氏は『謝靈運集校注』において『金剛般若経注』の逸文二条を挙げ、同書の制作を、謝靈運の三回の京師滞在のうち、第二回目の元嘉三年(四二六)春から同五年(四二八)春、秘書監、侍中として都にあつた時期、もしくは元嘉八年(四三一)会稽太守孟顛の告発に弁明するため急ぎ上京し冬まで都で過ごした時期のいずれかではないかと推測している。<sup>20)</sup>

このように先学の諸家の研究においては、謝靈運が『金剛般若経』に注したことを認定した上で、『文選』李善注に残された逸文を引き、『金剛般若経注』自体はすでに散逸して見ることができないとするのが共通しているところである。

ところが仏教学の宇井伯寿氏の一連の般若経研究の中に「金剛般若経及び論の翻訳並に註釈」<sup>21)</sup>と題する論文があり、それは氏が「弥勒頌世親釈の二訳と無著論の現存の二本」を研究するための「準備」のために書かれたものであるが、その前半部分に現存の僧肇注と呼ばれているものは、実際には謝靈運の手になったものであるとの注目すべき見解が述べられている。

宇井論文の論証方法は次のようなものである。宋代の金剛經注釈の一つである曇心述『金剛般若波羅蜜經采微』二卷（南宋 高宗紹興二年 一一三二）（統藏經九十二套一冊八六頁右）および明成祖纂輯洪運重刊『金剛經註解』四卷（明 英宗正統三年 一四三八）（統藏經三十八套五冊四二二頁左）の両書から、「肇法師曰……」「謝靈運曰……」「智者禪師（天台智顛）曰……」とある注文をそれぞれ僧肇二十三條、謝靈運十五條、天台智顛十四條を抜き出し、現存の伝僧肇撰『金剛經註』一卷（統藏經三十八套三冊二〇八頁右）および伝天台智顛撰『金剛般若經疏』一卷（大正藏三十三卷七五頁a段。また統藏經三十八套五冊四〇九頁右、元 徐行善『金剛疏科釈』一卷をも参照）の該箇所の注と比較する。

その結果、『金剛經采微』および『金剛經註解』から抜きだした「謝靈運曰……」とある注文十五條は、一二の文字の相違を除いてはすべて現存の伝僧肇撰の『金剛經註』一卷の該箇所に一致し、同じく『采微』および『註解』から抜き出した「肇法師曰……」とある注文二十三條はことごとく現存の伝僧肇注の言と一致せず、さらに「智者禪師曰……」とある注文十四条もすべて現存の伝天台智顛撰『金剛經疏』と一致しない。従つて次のような結論が導かれる。「……此の如き事実から推定して

- (一)、 現流の僧肇註と称せらるるものは実は謝靈運の註なること、
- (二)、 僧肇の註は既に散逸して、唯断片のみ知られて其全体は現今にては見られないこと、
- (三)、 現今天台大師の疏と称せらるるものは大師の真撰の疏とは異り、後世のものなること、
- (四)、 天台大師の疏も散逸して、現今としては断片のみ知らるるに過ぎないこと、

は殆ど疑ない所である。故に全く失はれたと思はれた謝靈運の註は現存して居るのであり、又何人かの疏が現存して



古くから之を天台大師の著と誤つて居たのである。」

このように宇井論文では僧肇・謝靈運・智顛あわせて五十二条の注文が前掲の『采微』および『註解』二書より抽出されて論文に箇条書きされ、おそらく氏の手元に置かれていたであろう伝僧肇撰『金剛經註』および伝天台智顛撰『金剛經疏』と比較された結果、前記の(一)から(四)までの結果が導き出されたわけであろう。しかし宇井論文の研究の目的が『金剛經』注釈における弥勒・無著・世親の三大論師の關係を明らかにすることに主眼があり(その成果は宇井伯寿著大乘仏教研究一『大乘仏典の研究』(岩波書店 一九六三年)に結実している)、この「金剛般若經及び論の翻訳並に註釈」の論文はあくまで「それに対する準備に外ならぬもの」と位置づけておられる事とも關係し、  
ようが、二書から抽出された僧肇・謝靈運・智顛の注文五十二条は論文に示されてはいるものの、この五十二条と比較対照されるべき相手である伝僧肇撰『金剛經註』と伝天台智顛撰『金剛經疏』の該当箇所が論文に示されていないため、読者にとつては一致しているかどうか判断できず、宇井論文の説の可否を検証すべき根拠が提示されていないことになる。そこで以下、宇井論文の体裁にならいつつ、『金剛經註』の注文も併わせ記して比較対照の作業を改めて行うことにしたい(宇井論文では同時に考証が行われている伝天台智顛撰『金剛經疏』の注文対照については当面の目的ではないため、ここでは除外する)。

(17) 李儼が別に撰した「大唐故翻經大德益州多宝寺道因法師碑文」(金石萃編 卷五十四)には、唐の高宗龍朔三年(六六三)の年号が記されている。

(18) 葉笑雪『謝靈運詩選』(上海古籍出版社 一九五七年) 一九一頁。

(19) 楊勇「謝靈運年譜」(『饒宗頤教授南遊贈別論文集』一三九頁 香港 一九七〇年)。

(20) 顧紹柏「謝靈運集校注」(中州古籍出版社 一九八七年) 三六九頁參照。

(21) 宇井伯寿「金剛般若經及び論の翻訳並に註釈」一九三一年十月稿(『宇井伯寿著作選集』第六卷 一六一頁 大東出版社 一九六七年) 參照。

宇井論文の存在は、荒牧典俊氏の論文「中国における仏教受容——『理』の一大変——」(大阪大学文学部『日本語・日本文化研究論集』第4号 一九八八年)の指摘によって知り得た。荒牧氏は同論文において、古代的な帝王政治原理としての「理」が、郭象・鳩摩羅什・竺道生・謝靈運を経て中世的な実践哲学原理としての「理」へと一大変し、北朝、さらには隋唐近世へと展開する道すじを大きく跡づけておられる。また荒牧氏も、創価大学の菅野博史氏の口頭による示教によって宇井論文の存在を知り得た旨、論文の注記に記しておられる。荒牧・菅野両氏の学恩に感謝したい。

## 五

宇井論文では「采微」と「註解」の二書からの引用によって考証が進められているが、ここでは注文の抽出および比較対照に使用する書籍を次の八書に広げることにする。

A 晋 僧肇注『金剛般若波羅蜜經註』<sup>(22)</sup> 一卷(金剛經註)(統藏經三十八套三冊二〇八頁右上)

B 宋 曇昶述『金剛般若波羅蜜經采微』<sup>(23)</sup> 二卷(金剛經采微)(統藏經九十二套一冊八六頁右上)

C 宋 楊圭・潘舜龍等輯『十七家解註金剛經』<sup>(24)</sup> 四卷(金剛經十七家注)(明 万曆元年(一五七三)刊本 京都大學人文科学研究所 松本文庫蔵)

D 明 成祖(太宗)朱棣集注『金剛經集注』<sup>(25)</sup> 一卷(明御纂本金剛經集注)(明 永樂二十一年(一四二三)内府刻

本影印 上海古籍出版社 一九八四年)

- E明 成祖(太宗)纂輯洪蓮重刊『金剛經註解』<sup>(26)</sup> 四卷(金剛經五十三家注)(統藏經三十八套五冊四二二頁左上)
- F明 韓巖集解 程衷懋補注『金剛般若波羅蜜經補註』<sup>(27)</sup> 二卷(金剛經補註)(統藏經九十二套三冊二五三頁左上)
- G清 無是道人注解『金剛經如是解』<sup>(28)</sup> 一卷(金剛經如是解)(統藏經三十九套三冊一八五頁左上)
- H清 存吾闡說『金剛經闡說』<sup>(29)</sup> 二卷(金剛經闡說)(統藏經九十二套四冊四〇六頁右上)

作業の手順ならびに表の構成は左のようになってゐる。

- (1) B〔金剛經采微〕およびE〔金剛經五十三家注〕から、「肇法師曰……」あるいは「謝靈運曰……」等の表現によつて示される僧肇と謝靈運の注文をすべて抜き出す。

- (2) (1)によつて得られた注文に対応する部分をA〔金剛經註〕に求め、Aの注文と(1)によつて抽出されたB・Eとの注文を比較対照する。

- (3) その際、文章が同じ部分があれば傍線で示し、その前後や中間の若干の一致しない部分には△印をつけ、注意を喚起する(しかし文章が全く異なる場合には△印で示す事はしない)。

右を大原則とし、(4)～(9)までは附則である。

- (4) 表の全体の分量の関係上、F〔金剛經補注〕、G〔金剛經如是解〕、H〔金剛經闡說〕については僧肇の言を抜き出すことをせず、謝靈運の言のみを取り出し、同じく(2)の作業を行なう。

- (5) A〔金剛經註〕には本来記されていないけれども、便宜のために梁の昭明太子が作ったといわれる「三十二分

分目」に従い、「○法会因由分第一」のように分節を示した。

- (6) 分節のすぐ左に示されるのが經の本文（經の本文はA〔金剛經註〕所載のものに従っている。また注に関係ある部分だけで、金剛經の全文を引くことはしていない）、その左に通し番号を附してならべられているのが注文である。注文の上の《》印の中は、本文のいかなる言葉に注したのかを筆者が推定して、示したものである。
- (7) 注文の通し番号の上の\*印は、字井論文ですでに引かれている条であることを示す。
- (8) 句読は不備な点が多々あるものの、一応、統藏經のものに従ってある。
- (9) 検索の便のため、注文にはすべて統藏經等の頁数・行数を示した。

『金剛般若經』僧肇・謝靈運注文対照表（前半）

○法会因由分第一

如是

- 1 《如是》 仏臨泥洹時、侍者請曰、一切經首、皆致何等、仏勅阿難、応言如是乃至時衆也、如我所伝、如仏所説、称如是也 A〔金剛經註〕（三八套三冊二〇八頁左下五行）

\* 2 《如是》 肇師謂、如是者、信順之辞、信則所聞之理会、順則師資之道成<sup>(30)</sup> B〔金剛經采微〕（九二套一冊八七頁

右下一六行）

我聞

3 《我聞》若從佗傳聞、不必如是、我親承金口、而聞事非謬矣 A〔金剛經註〕(三八套三冊二〇八頁左下九行)

\* 4 《我聞》肇師云、明出經者親承聖旨、無傳聞之謬 B〔金剛經采微〕(九二套一冊八七頁左上二一行)

一

5 《二》謂是自聞當理、以不自不當理、<sup>31)</sup> 佗之何為、言則當理、理亦如言、言理不差、故言一也 A〔金剛經註〕

(三八套三冊二〇八頁左下二二行)

時

6 《時》雖曰當理、容不得時、若不得時、何能悟人、明聖不虛說、言必會機、時哉之說也 A〔金剛經註〕(三

八套二〇八頁左下一五行)

\* 7 《一時》肇法師曰、一時者、說此般若時也 E〔金剛經五十三家注〕(三八套五冊四二六頁左下六行)

○善現起請分第二

時長老須菩提、在大眾中、即從座起、偏袒右肩、右膝著地、合掌恭敬

8 《恭敬》夫神鍾〔神鍾〕疏作〔鉅鐘〕<sup>32)</sup>雖朗、非扣而不鳴、聖不孤庇、影響唯仁、師尊道重、故尅〔尅〕作

「克」敬尽恭也 A〔金剛經註〕(三八套二〇九頁右下七行)

\* 9 《合掌》肇師云、請法之相 B〔金剛經采微〕(九二套一冊八九頁右下一五行)

唯然世尊、願樂欲聞

10 《唯然》慈戒〔戒〕疏作〔誠〕許說、敬肅傾心 A〔金剛經註〕(三八套三冊二〇九頁左上二二行)

11 《唯然》謝公△△△云、慈戒許說、敬肅傾心 B〔金剛經采微〕(九二套一冊九〇頁右上七行)

○大乘正宗分第三

○妙行無住分第四

復次須菩提、菩薩於法應無所住、行於布施、所謂不住色布施、不住声香味触法布施

12 《無住・布施》次答住行、即明法空、謂法彌曠、略舉內則六度、外為六塵、內外諸法、斯皆因緣無性、因緣無性、

則心無停處、故應無住也、捨心無恚、謂之布施、無相可存、何恚之有、施為六度之首、塵為法生之基

「基」疏作「機」、二法皆空、于何不尽、既得法空、解明行立、無復退失、故言住也 A〔金剛經

註〕(三八套三冊二一〇頁右上三行)

13 《布施》肇法師曰、会方法歸于自己者、其惟聖人乎 D〔明御纂本金剛經集注〕(四四頁三行)

須菩提、菩薩但應如所教住

14 《教住》聖言無謬、理不可越、但当如仏所教而安心也 A〔金剛經註〕(三八套三冊二一〇頁右下三行)

\* 15 《教住》謝靈運曰、聖言無謬、理不可越、但当如仏所教而安心耳 E〔金剛經五十三家注〕(三八套五冊四三四

頁左下一六行)

16 《教住》謝靈運曰、聖言無謬、理不可越、但当如仏所教而安心耳 H〔金剛經闡說〕(九二套四冊四〇八頁右下

九行)

○如理實見分第五

○正信希有分第六

無法相、亦無非法相

17 《無法相》無因緣法相、亦無無因緣之非法相 A〔金剛經註〕(三八套三冊二一〇頁左下一〇行)

\* 18 《無法相》肇法師曰、無法相者、明法非有、遺著有<sup>34</sup>心也、亦無非法相者、明法非無、遺著無心也 E〔金剛經五

十三家注〕(三八套五冊四三六頁左上六行)

○無得無說分第七

非法非非法

19 《非法》非法則不有、非非法故不無、有無並無、理之極也 A〔金剛經註〕(三八套三冊二一一頁右下六行)

\* 20 《非法》謝靈運曰、非法則不有、非非法則不無、有無並無、理之極也 E〔金剛經五十三家注〕(三八套五冊四

三七頁左下六行)

21 《非法》謝云、非法則不有、非非法則不無、有無並無、理之極也 G〔金剛經如是解〕(三九套三冊一八九頁左

下一〇行)

22 《非法》謝曰、非法、則不有、非非法、則不無、有無並無、理之極也 H〔金剛經闡說〕(九二套四冊四〇八頁

左上一四行)

○依法出生分第八

何以故、是福德即非福德性、是故如來說福德多

23 《非福德性》福德無性、可以因緣增多、多則易差、故即遣之耳 A〔金剛經註〕(三八套三冊二一一頁右下一六

行)

\* 24 《非福德性》謝靈運曰、福德無性、可以因緣增多、多則易著、故即遣之 E〔金剛經五十三家注〕(三八套五冊

四三八頁左下一五行)

○一相無相分第九

須菩提、於意云何、斯陀含能作是念我得斯陀含果不、須菩提言、不也、世尊、何以故、斯陀含名一往來、而實無往來、是名斯陀含、

須菩提、於意云何、阿那含能作是念我得阿那含果不、須菩提言、不也、世尊、何以故、阿那含名為不來而無不來、是故名阿那含

25 《一往來・無往來》注文なし A (金剛經註) (三八套三冊二二一頁左下三行)

\* 26 《一往來・無往來》肇師云、証無為果、不見往來相 B (金剛經采微) (九二套一冊九五頁左上八行)

\* 27 《一往來・無往來》肇法師曰、一往來者、一生天上、一生人中、便得涅槃、故名一往來、而實無往來者、証無為果時、不見往來相也 E (金剛經五十三家注) (三八套五冊四四一頁右下九行)

須菩提、於意云何、阿羅漢能作是念我得阿羅漢道不、須菩提言、不也、世尊、何以故、實無有法名阿羅漢、世尊若阿羅漢作是念我得阿羅漢道、即為著我人衆生壽者

28 《阿羅漢》阿羅漢者、無生也、相滅生尽、謂之無生、若計念則見我人、起相受生、非謂羅漢、諸果類亦亦爾、但隨義異明耳 A (金剛經註) (三八套二二一頁左下一行)

\* 29 《阿羅漢》謝靈運曰、阿羅漢者、無生也、相滅生尽、謂之無生、若有計念、則見我人起相也 E (金剛經五十三家注) (三八套五冊四四二頁右上三行)

以須菩提實無所行、而名須菩提是案阿蘭那行



30 《名須菩提是業阿蘭那行》得名不虛、必積<sup>△</sup>「積」疏「稱」實也 A (金剛經註) (三八套三冊二二頁右上五行)

\* 31 《名須菩提是業阿蘭那行》謝公云、得名不虛、必稱實也 B (金剛經采微) (九二套一冊九六頁右下一二行)  
○莊嚴淨土分第十

不也、世尊、何以故、莊嚴仏土者、即非莊嚴、是名莊嚴

32 《莊嚴》相或「或」疏作「惑」必土穢、虛明則國淨 A (金剛經註) (三八套三冊二二頁右上二二行)

\* 33 《莊嚴》肇法師曰、是名離相莊嚴仏土 E (金剛經五十三家注) (三八套五冊四四三頁左下一七行)

○無為福勝分第十一

須菩提、如恒河中所有沙數、如是沙等恒河、於意云何、是諸恒河沙、寧為多不、須菩提言、甚多、世尊、但諸恒河、尚多無數、何況其沙、須菩提、我今實言告汝、若有善男子善女人、以七宝滿爾所恒河沙數三千大千世界、以用布施、得福多不、須菩提言、甚多、世尊、仏告須菩提、若有善男子善女人、於此經中、乃至受持四句偈等、為他人說、而此福德、勝前福德

34 《勝前福德》第二広格 A (金剛經註) (三八套三冊二二頁右下一一行)

\* 35 《勝前福德》肇法師曰、良由施福是染、沉溺三有<sup>36</sup>、謂三界、三界不離於有、故謂之三有<sup>36</sup>持經福淨、超昇彼岸、是故勝也 E (金剛經五十三家注) (三八套四四六頁右上七行) (未完)

(22) 統藏本刊行の際本となった藏經書院旧蔵書は京都大学附屬図書館に藏經書院文庫として一括寄贈されている。この統

蔵本『金剛經註』の底本も当然蔵されているものと判断し、京大図書館の蔵經書院文庫のカードボックスを検したが、当該書のカードを探し出すことはできず、また蔵經文庫はすべて貴重書扱いとなっているため、担当の係官にその金剛經関係の諸書が置かれている棚を調べていただいたが、『金剛經註』は蔵されていないようであった。推測にしかすぎないが、後の注(31)に記すような理由によつて、敬雄が撰した『肇公注金剛經助覽』と二冊で一部になっている宝曆十三年刊の『肇公注金剛經』(例えば四〇〇—四一頁に挙げた龍谷大学もしくは大谷大学所蔵本等)を底本としているのではないだろうか。この『金剛經註』に限らず統蔵經の底本については未解決の問題が今なお多いように思われる。

また、『昭和法宝目録』第三卷の「建仁寺両足院蔵書目録」(原本は京都大学人文科学研究所蔵) 九七七頁b段には、「肇注金剛經(写 有注記) 一」とあつて写本の存在が記されているが、残念ながら未見である。

なお宝曆十三年刊本にはいづれも「肇公注金剛經」(刷外題)のように「注」が使われて「註」の字は使用されていないが、謝靈運の「注」と区別するため、便宜上統蔵經の目録の表記——「金剛經註」——に従つておく。

(23)

巻首に紹興壬子(一一三二)の年号を持つ曇応の敍が載せられている。

蔵經書院文庫に写本が蔵されており、請求番号は蔵—5・コ・31。統蔵經刊行のために他の刊本より書写されたごく新しい写本で、墨書の上に朱筆で校正が書き入れている。統蔵本では何も記載はされていないものの、原写本の上巻の末尾には朱筆の×印で抹消されているが

左街録主管教門公事園覚院住持妙慧弁才大師思彦 捨板一副 淨教院住持伝教通鑿大師如淨 捨錢書字 乾道元年

八月十五日 侍者比丘 法新 募縁開板

の刊記が見てとれ、乾道元年(一一六五)に募縁開板されたものであることが分かる。

同じく下巻の末尾には「右街僧録主管教門公事上天竺住持伝教比丘若訥助縁一十五千省」ほか十五名の助縁者の名前が記されている。

(24)

『十七家解註金剛經』の呼称は「京都大学人文科学研究所漢籍目録」による。松本文庫所蔵本(請求番号 松本文庫一八〇〇)を見ると外題には「金剛經十七家注」(書題箋)となつており、十七家注が世称となっていることが知られる。巻一 十三葉裏に記された刊記は次のとおり。

此經全部共計二百二十五葉 分為四卷以成書式大字楷書 方便老眼外心經節要一部附 茲統施印板見貯三山南台 后 浦復初庵十方有縁法眷或求 印者聽其自便万曆元年題記

(25) 巻首に二葉の絵相ならびに青除災金剛等の十二圖と宋の紹定辛卯(一二三二)の年号が記された楊圭の序がある。  
上古古籍出版社の影印本の解題は次の通り。

《金剛經集注》、原有南宋紹定楊圭十七家釈義四卷、後演爲五十三家注四卷。明御纂本摒除五十三家中伝爲梁昭明太子所作三十二分目、略減注者數家、而益以三十余种經文或注文、哀成一卷。清黃虞稷《千頃堂書目》著録有「《太祖集注金剛經一卷》、成祖御製序。」考本書成祖序文、「朕夙欽大覽、仰慕真如、間閱諸編、選其至精至要經旨弗違者、重加纂輯、特命鈔梓、用広流伝。」可知此書爲成祖自行重纂。明太祖集注本今未之見、但成祖另有永樂九年五月初一日御製序(見清鄧暉《金剛經輯注》) 転録、与本書永樂二十一年(一四二三)四月十七日序大異、且超前十余年、或其即是專爲太祖集注本所撰、而本書則是將太祖集注本「重加纂輯」而成的修訂本。

(26) 巻首に正統三年(一四三八)の年号を持つ洪蓮の序がある。本書は『金剛經五十三家注』と世称される。京大図書館蔵經書院文庫には統藏本の底本となつた刊本が蔵されている。請求番号は蔵一五・コ・六。外題は「金剛經註解」(刷題簽)。題簽の下部に双行で「昭慶慧空經房印造流通」とある。四巻の巻末「跋」二葉裏に、注(23)の場合と同じく朱筆で抹消されてはいるものの、次の刊記が見てとれる。

道光二十四年歲次甲辰季夏月

淨業弟子張翰屏重刊

閒地庵比丘梅嶼校正

同治十三年歲次甲戌仲冬月

本房弟子翻刻

板存浙昭慶寺慧空經房印造

従つて統藏本の底本は同治十三年(一八七四)の翻刻本であることがわかる。

さてC(金剛經十七家注)とD(御纂本金剛經集注)とE(金剛經五十三家注)との關係であるが、Cの序文に「(楊)圭捐金鈔梓、以広法施云」とあり、Dの序文に「(成祖)重加纂輯、特命鈔梓、用広流伝」とあり、またEの序文に「(洪蓮)由是會約同志、罄捨珍資、命工重刊印施」とあるところからすると、基本的にはC—D—Eの順序で増広改変が加えられたのであろう。Cの一書はその「序」や「科儀」「十七家解註金剛經姓名目錄」までをも含めて、Eに合採されており、また一方DもほぼEと変わるところはないことにより、後の対照表ではEによつてC・Dを代表

させてあつて、C・Dの注文はいちち挙げていない。しかしCからD・Eへ行く過程で、謝靈運の注文を例に取れば、Cにはない数条がD・Eには加えられており、またDからEへの重刊の過程においても注文の扱いに若干の相違が見られるため、対照表ではEを中心としつつ、C・Dと相違がある場合にはその旨注記で示すことにする。

(27) 卷首に明の熹宗天啓丙寅（一六二六）に書かれた「汰生居士查応光撰」の序文が附されている。

(28) 卷首の無是道人の「自述」には年号はないが、無是道人の自述の次には別の序があり、「順治丁酉臘八日攜李道一居士譚貞繁談謹撰」とあつて、世祖順治十四年（一六五七）の年号が見える。

(29) 卷首に清 仁宗嘉慶二十一年（一八一六）の年号が記された存吾の自序がある。

(30) 『注維摩詰經』巻第一に、「肇曰、如是信順辭、夫信則所言之理順、順則師資之道成」（大正藏三十八卷三二八頁a段）とほぼ同文の注が存在する。対照表の2の『采微』の注文では「肇師謂……」となつており、同じく4や11の『采微』の注文では「肇師云……」「謝公云……」となつているところからすれば、2の注の「謂」の語は他書から僧肇の文を引用したことを示すのかもしれない。

(31) 駒沢・龍谷・大谷・佛教大學蔵本ともいずれも「以不若不当理」（二丁裏）とあるにもかかわらず、続蔵本は「以不<sub>レ</sub>自不当理」に作り、「若」を「自」に改めている。そこで敬雄撰『肇公注金剛經助覽』を見ると「若字疑、誤、<sub>レ</sub>応<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>字<sub>二</sub>、詩<sub>二</sub>、小雅<sub>二</sub>云、不<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>躬<sub>レ</sub>、庶民不<sub>レ</sub>信<sub>レ</sub>」（二丁表）とあり、『詩經』を典故として「若」を「自」に改めるべきことを説いており、続蔵本は敬雄の校勘を尊重して字を改めたかのごとくである。

(32) 「」内に示したのは敬雄の「校讎」の語である。伝天台智顛撰『金剛般若經疏』は、字井論文において「金剛經註」が僧肇撰ではないとされたように、やはり同論文において智顛の真撰ではないと結論づけられている。この作者不詳の『金剛般若經疏』には、伝僧肇註『金剛經註』の文章がことわりなく地の文として随所に引用されており、例えば、長老須菩提是對揚主、有長人之徳夫鉅鐘雖朗非扣不鳴、聖不孤應影響唯仁須菩提翻空生、亦名善吉、或云東方青龍陀仏、從座起者請業之儀、即事請道側身避席、袒右肩者隋國法以袒為敬、亦示弟子執作為便、右膝著地屈曲伏從、示無違拒之貌、合掌歛容祇肅頭師導道重故、克敬尽恭專一之至（大正藏三十三卷七六頁c段十五行）  
唯然下受旨願聞、慈誠許說敬爾傾心也、仏告下第二広答爲三（大正藏三十三卷七七頁a段八行）

の前の二つの傍線部分は対照表の注文8（A）がそのまま引かれたものであり、後の傍線部分は対照表注文10（A）がそのまま引用されたものである。敬雄はこの伝天台大師撰『金剛經疏』によって、伝僧肇註『金剛經註』を校勘してい

る。

この『金剛般若経疏』には智顛特有の釈風が現われていないことから、天台大師の真撰ではないだろうとする意見が強いようである（佐藤哲英『天台大師の研究——智顛の著作に関する基礎的研究——』四〇八頁〔百華苑 一九六一年〕参照）。

(33) この注文はC〔金剛経十七家注〕ならびにE〔金剛経五十三家注〕には存在しない。

(34) この注文はC〔金剛経十七家注〕にはない。

(35) E〔金剛経五十三家注〕ではこの注文の後の「有註云……」以下も謝靈運の注だとしているが、C〔金剛経十七家注〕の該当箇所（二巻十七葉裏）を見ると別行になっており、おそらく靈運の注ではないのであろう。

(36) へへ内は統蔵経では割注になっている部分である。

〔附記〕 本稿は日本中国学会第四十三回大会（一九九一年十月二十日 神戸大学）における口頭発表に基づくものである。また小論をまとめるにあたって、当時大谷大学特別研修員梶浦晋氏に種々御教示をいただいたことに感謝したい。